

マラキ書3章16-18節 「霊的倦怠にならないために」

1A いい加減になっていた礼拝

1B 神の選びの愛

2B 神の恐れ of 欠如

3B 教会批判

4B 愛の欠如

1C 隣人愛

2C 離婚(一つ霊)

5B 十一の捧げ物

2A 主を恐れる者たち

1B 聞いてくださった御名

2B 宝の民

本文

マラキ書 3 章を開いてください。私たちの学びが、旧約聖書最後のマラキ書に入りました。学びをしているうちに、とても内容が深いことが分かりました。当初、1 章から 4 章までを一節ずつしようと思っていましたが、4 章は来週の午前礼拝に持ち越したいと思います。マラキ書は、新約聖書に入るためのつなぎの預言書です。なぜ、福音書の全てが、イエス様の公生涯についてバプテスマのヨハネから書き始めるのか、マラキ書に鍵があるからです。それで午後礼拝は、1-3 章を一節ずつ見て行きたいと思います。今朝は、3 章 16-18 節を読み、1 章から 3 章を概観したいと思います。「16 そのとき、主を恐れる者たちが、互いに語り合った。主は耳を傾けて、これを聞かれた。主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で、記憶の書がしるされた。17 「彼らは、わたしのものとなる。・・万軍の主は仰せられる。・・わたしが事を行なう日に、わたしの宝となる。人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。18 あなたがたは再び、正しい人と悪者、神に仕える者と仕えない者との違いを見るようになる。」主の御名を尊ぶ、主を恐れるということです。

1A いい加減になっていた礼拝

私たちは、ゼカリヤ書を読み終えましたが、その前がハガイ書で、この二つの預言書は神殿の再建の工事の時のものでした。神殿の工事完成し、しばらくの時が経っています。約百年は経ってのではないかと思われます。神殿の再建は 516 年に完成しましたが、紀元前 450-430 年辺りではないかと言われています。エズラがエルサレムに帰還した頃、紀元前 458 年、ネヘミヤが帰還した頃、444 年の頃と重なっています。ゼカリヤとハガイの預言に励まされて、喜んで進んで主に仕えていた頃とは異なり、霊的に倦怠期に入っていました。エズラ記とネヘミヤ記にも、その様子が窺えます。ユダヤ人が外国人と結婚していて、その子どもがヘブル語を話せないと言う状

況までありました。そして何と、祭司の子らの中にそのような異邦人との結婚もあり、エズラは愕然とし、ネヘミヤは怒り狂いました。そして、捧げ物が滞っていました、十一の捧げ物がなかったために、レビ人たちは自分たちの家に戻りました。安息日に商売をしている者たちもいました。せっかく、神殿が再建されたのに、いざ、一度、安定が与えられると、その礼拝自体が疎かになっている姿を見ます。

けれども、これは本人たちが、気づかないうちにそうなっていたものでした。マラキ書の特徴は、主が語りかけられると、「どのように、私たちがそんなことをしているのですか？」と問いかけているからです。例えば、「あなたは、礼拝を疎かにしている？」と言われても、「えっ？どのように礼拝を疎かにしているのですか？」と主に問いかけています。神殿において、礼拝で捧げ物はしていたからです。そこで、主がその一つ一つに答えておられるのですが、言い換えると自分たちで気づいていなかったということです。これを、「霊的な倦怠期に入っている」と言ったらよいでしょうか？同じことをしていて、主との生きた交わりから離れてしまって、主に対する不信が出て来てしまっている状態です。キリスト者であれば、誰でも霊的な倦怠、あるいは霊的なスランプというものは経験します。

しかし今、読んだ箇所は、その危険から守られて、主の名を真実に敬って、主を恐れて、互いに語り合っている者たち、主に仕えている者たちの姿が書かれています。そこには、喜びがあり、聖さがあり、愛があり、平安があるでしょう。聖霊の実が結ばれています。ユダが手紙の中で、「神の愛のうちに自分自身を保ち」なさいと言いました(21 節)。そこで、どのようにして霊的倦怠に陥ったのか、そしてどのようにして、主の御名を恐れることができるのか？それを見て行きたいと思えます。

1B 神の選びの愛

まず、1 章 2-3 節を見てください。「2 「わたしはあなたがたを愛している。」と主は仰せられる。あなたがたは言う。「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と。「エサウはヤコブの兄ではなかったか。…主の御告げ。…わたしはヤコブを愛した。わたしはエサウを憎み、彼の山を荒れ果てた地とし、彼の継いだ地を荒野のジャッカルのものとした。」」第一に、「わたしは、あなたを愛している」という言葉に対して、彼らは驚くべきことに、「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と答えていることです。彼らは、神に愛されているという確信、安心感、保障がありませんでした。神の愛に対して、自分自身を任せていなかったのです。そのために、自ずと神に対する敬いがなくなっていくます。心が神から離れていました。

しばしば、礼拝に出席すること、献金など捧げ物をするを教会では強調します。しかし、心がスランプ状態の時は、そのようなことを言われれば言われるほど、重荷となってきます。「そうしたいのは山々だが、心が伴わない。」という思いも出て来るでしょう。また、礼拝に熱心に出席しているのに、どうして良いことが起こらないのか、どうして思い通り事が運ばないのか？という疑問も出

て来るかもしれません。

そこで思い出していただきたいのは、神との関係において、常に「神が自分に何をしてくださったか」を思い出すことです。神との関係において、「自分が何をしたか、あるいはしなかったか」ということを焦点に置くと、必ず焦点が合わなくなってきました。それはあたかも、マンションに住んでいて、マンション全体が今、工事をしている断水しているのに、自分の家で水が出てこない、水道の蛇口を取り替えたり、自分の家の水道管の開け閉めをして水を出そうとしているようなものです。自分が何をしたかしなかったか、ではなく、「神が何をしてくださっているか」を忘れているからです。神が自分を愛しておられる、ということが分かれば、自ずと応答する、神を敬い、礼拝したい、神に仕えたいと思うからです。その源があってこそ、御霊の水であります。

律法学者シモンと、不道德な女の対比を思い出してください。シモンがイエス様を自分の家に招き、食事をしていました。そこに、不道德な女がやって来て、イエス様の足に涙を流し、それを神の毛でふき取り、さらに香油を塗りました。シモンは心の中で、「預言者であるならば、この女が罪深い者であることを知っているはずだ。」と言いましたが、イエス様は、五百デナリ、五十デナリ借金している者がいて、金貸しがどちらも帳消しにしてあげたのだが、どちらが余計に金貸しを愛するか？と尋ねたら、当然、五百デナリ帳消しにもらったほうが愛するとシモンは答えます。それで、シモンがいかに、イエス様を自分の家に招く時に愛の行ないが伴っておらず、この女には愛の行為が伴っていたかを比べました。そして言われました、「この女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女はよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。(ルカ 7:47)」と言われました。

思い出すのは、二年前でしょうか、伝道者フランク・グラハム氏が伝道集会セレブレーション・オブ・ラブで説教をしていた時のことです、「神はあなたを愛しておられます」と何度となく繰り返していました。どんなに繰り返しても、いや繰り返すからこそ、「そんなことは分かっている。」と思って、実際は神があなたを愛しておられるという真理を心から受け入れていなかったりします。この真理は何度も何度も思い出す必要があります。

どのように愛しておられるのか？「ヤコブを愛して、エサウを憎む」というところに表れていることを、主は示しておられます。ヤコブは、生まれる前から神によって選ばれ、弟なのに兄よりも偉大になることを告げられていました。生まれる前から選ばれていたのですから、ヤコブが何をしたから愛されているということではないのです。神の愛は、もっぱらご自分の憐れみによるものであり、むしろ、何もしていないのに愛されていたから、ヤコブは主を愛して、主に仕える者として、少しずつ変えられていったのです。そして、エサウの子孫、エドムの住む山地が荒れ果てたものとなるということを神は語っておられます。

ユダヤ人にとって、このことがなかなか実感できないものであったことでしょう。バビロンに捕え

移されて、帰還したものの多くの反対を受けました。そして、ペルシヤの支配下で、彼らはかろうじて礼拝を守ることができています。それなのに、なぜ愛されているのか？という疑いが出て来るでしょう。けれども、彼らの歩みは神の選びの愛でいっぱいでした。荒野の旅をしている時も、その食べ物に事欠くことはなく、履いていたサンダルも擦り切れることはありませんでした。敵からの攻撃からも主は守ってくださいました。そして、彼らが南東に目を向ければ、そこは岩山であり、荒れ果てているのです。自分たちのところは緑がいっぱいなのに、エドムの山地は荒地なのです。神によって初めから愛されていたことが、なかなか気づかない状況でした。

私たちも、心が試されます。何か試練や反対があれば、神が愛しておられないのではないか？という疑いが出てきます。けれども、実はよく自分の生活を見ると、こんなにも愛されているのに、という神の証しが、至るところにあるはずなのです。

2B 神の恐れの欠如

では、次の霊的倦怠を見てみましょう。1章6節です、「子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。・・万軍の主は、あなたがたに仰せられる。・・わたしの名をさげすむ祭司たち。あなたがたは言う。『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか。』と。」この後、祭司たちがいけにえの動物が、目がつぶれていたり、足がきかなかったり、病気のものを捧げていることによって、神の名を蔑んでいると主は言われています。もし、相手がペルシヤの総督であれば、このような捧げ物をしないではないか？なぜ、主なる神にこのようなものを捧げることができるのか？と問われています。私たちにとって神は、御父であられ、主人でもあられます。けれども、地上の父や主人には敬意を示すことができるのに、なぜ主なる神にそれができないのか？という問いかけです。

主に対する恐れについて話す時に、人に対する恐れを話す必要があるでしょう。普段は、日常生活において、人辺りが良く、きちんと約束は守り、敬うべき人を敬っている人であっても、教会において、その同じ敬いを神に対して見せることのできないことがありますね。主なる神は目で見ることのできない方ですが、歴然と生きておられる方です。自分が普段敬っている人々以上に、敬うべきお方です。けれども、他の人間関係についてはとても大切にします。そしてなぜか、主に対する敬いについて話すと、「強制しないでください」ということになります。日本語でいう「真面目な人、人辺りの良い人、優しい人」というのは、しばしば、人の目に対してそうであって、隠れたところではどうか？ということ、また別であることがあります。人に対しては親切にしなければいけないと教えられていますが、それは心から、隠れたところから出て来るという教育は受けていないからです。しかし、主は私たちの心を見ます。隠れたところの行ないを見ます。そこにおいて、純粹でなければ、いかに自分が周囲の人々に良くしても、それは偽りとなるのです。したがって、私たちを正しく裁くお方、主なる神に私たちは第一の敬意を払うべきなのです。そうすることによって、心と思いが一新されて、それで初めて、他の人々との関わりにも正しく対処することができます。

3B 教会批判

霊的な倦怠に陥ると、教会批判を展開することになります。1章12節を読みます。「しかし、あなたがたは、『主の食卓は汚れている。その果実も食物もさげすまれている。』と言って、祭壇を冒瀆している。」これは、言い方を変えるのであれば、「教会で礼拝と言っても、あの人がいるからね、この人がいるからね、牧師も酷いよ。」とか、「賛美がなっていないね、説教も酷いし。」とさげすんだり、「愛がない」というパンチをすることもあります。心や思いが、主に向かうのではなく、他のものに向かい、それでそういった批判を展開させるのです。

4B 愛の欠如

1C 隣人愛

その時に気づいていないのは、「兄弟を裁きながら、自分自身を裁いている。」ということです。兄弟のことを裁いている時に、その同じ量りで自分も裁かれているということです。主を敬わないということは、そのまま隣人、すぐそばにいる人々をないがしろにすることにつながります。3章5節には、「わたしは、さばきのため、あなたがたのところに行く。わたしは、ためらうことなく証人となり、呪術者、姦淫を行なう者、偽って誓う者、不正な賃金で雇い人をしいたげ、やもめやみなしごを苦しめる者、在留異国人を押しつけて、わたしを恐れない者たちに、向かう。」とあります。世においては、このような仕打ちは日常茶飯事です。偽りや不正、人を押しつけることなどです。そして心が世に向かっていないために、教会においても、それを行なうことができると思います。いや、むしろ身近な人々、一見、弱く見える人々ですから、そういった人々に対して、自分の横暴さを見せるのです。教会は、主が敢えて弱い者、愚かな者、取るに足りない者を選ばれて、キリストの強さ、キリストの賢さを示すところです。ですから、その一見するところの弱さを見て、自分の甘えを出し、内弁慶になります。家族でもそうでしょう、周りには八方美人でも、身近な人には甘えるという弱さがあります。神の家族である教会に対しても、同じことをしてしまいます。

それで、使徒ヨハネは、「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。(1ヨハネ 4:20)」と言っています。

2C 離婚(一つ霊)

そして最も身近な人と言えば、伴侶でありましょう。なんと祭司たちが、同じレビ族である妻を離縁して、外国の女と結婚しているということが起こっていました。それで、2章15-16節で、マラキや預言します。「15 神は人を一体に造られたのではないか。彼には、霊の残りがある。その一体の人は何を求めるのか。神の子孫ではないか。あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。あなたの若い時の妻を裏切ってはならない。16 「わたしは、離婚を憎む。」とイスラエルの神、主は仰せられる。「わたしは、暴力でその着物をおおう。」と万軍の主は仰せられる。あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。裏切ってはならない。」霊的に倦怠すると、本当にそばにいる人、神が一心同体にくださっている人をないがしろにします。そして、他の女性に魅力を感じます。そして、

そこに恋した時の思いを投影させます。そして心がどんどん自分と人生を共にしている伴侶から離れて行きます。それがいかに虚しいことか、実体の伴わないものです。しかし、主に対して心が冷えれば、その落胆や疲れ、傷を他のものによって埋めようとしてしまいます。

5B 十一の捧げ物

そして、霊的な倦怠は、献金にも表れてきます。3章8節です、「人は神のものを盗むことができようか。ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだのでしょうか。』それは、十分の一と奉納物によってである。」礼拝というのは、王なる方に自分自身を捧げることです。全てを明け渡すことです。すべてのものは、王の所有物であり、王の主権の中にあります。したがって、そこに自分自身のものを持っているのであれば、それは盗んでいるのと同じことです。

十分の一というのは、祝福の原型です。アブラハムの祝福にその始まりがあります。アブラハムがロトを救出した後、シェレム、すなわちエルサレムの王メルキゼデクが、いと高き神の祭司であって、彼を祝福したのです。「祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られた方、いと高き神より、あなたの手に、あなたの敵を渡されたいと高き神に、誉れあれ。(創世 14:19-20)」ここには、単なる地上の王でもない、天から来られた方、王であり祭司であられる方がおられます。その方から祝福を受けて、アブラハムは全ての物の十分の一を彼に与えました。私たちが、偉大なる王、神を礼拝する時に、その天にある祝福にあずかるのであれば、十分の一を自分のところにとっていくことは、とてもできません。それを、主にお返しすることによって、主なる神にお会いしたその祝福に対する応答をするのです。

ですから、これは実に、自分を注ぎだす礼拝行為です。賛美が主のすばらしさを思って、心から溢れて来るもののように、王なる方、祭司なる方に触れる時に、自ら捧げたいと願うものです。そして、それを自分のものにとっておきたいというならば、おそらく主なる方のすばらしさに出会っていないだろうし、祝福されてもいないでしょう。

2A 主を恐れる者たち

以上、マラキ書に書かれている大きな流れを見てきました。主への礼拝は形式上行なっていますが、実際は心が離れているという危機が訪れます。しかし、そこで主の御名を本当に敬う、ただ口先ではなく、主ご自身を恐れるならば、主は親しく近づいてくださいます。それが、初めに読んだ本文です、もう一度 16-17 節を読みます。「**16 そのとき、主を恐れる者たちが、互いに語り合った。主は耳を傾けて、これを聞かれた。主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で、記憶の書がしるされた。17 「彼らは、わたしのものとなる。万軍の主は仰せられる。わたしが事を行なう日に、わたしの宝となる。人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。」**再び主に仕えることのできる秘訣は、主を恐れることです。本気で、主の御言葉を捉えることです。主がここにおられることを、本当に信じることです。そして、主の御名を敬い、互いに語り合う

ことです。そうすれば、主が近づいてくださいます。「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。(ヤコブ 4:8)」

1B 聞いてくださった御名

主は、私たちが主を恐れる時に語るその会話を聞いておられます。それを親しく聞いておられるのです。なんとすばらしいことでしょうか？人々が、イエス様の御名を本気で信じて、そしてイエス様の御名で祈る時、そこに父なる神が親しく聞いてくださり、その祈りを聞かれるのです。使徒たちが、イエスの御名によって足なえを立ち上げました。イエスの御名によって、罪の赦しを宣言しました。イエス様の御名によって、自分たちの願いを父なる神は聞いてくださり、そこに多くの実が結ばれます。正真正銘の弟子となることができます。「わたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。(ヨハネ 14:13)」

そして、主は私たちをご自分の記憶の書に入れてくださっているのです。いつまでも、主の前に覚えておられるということです。私たちの主は、私たちが神を恐れて行なったことについて、必ず覚えていてくださいます。そこには豊かな報いがあります。「神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。(ヘブル 6:10)」

2B 宝の民

そして主は、私たちを宝の民としてくださいます。私たちが主を自分の宝のように貴いと思っているだけでなく、主にとって私たちが宝のようにみなしておられるということです。私たちが、神の国の相続を約束されているだけでなく、神が私たち自身をご自身の相続、分け前だと思ったださっています。(エペソ 1:18) イエス様は、たとえて畑の中の宝を話されました。「マタイ 13:44 天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。」主がこのように、私たちを貴いとみなしてくださるのです。

こうやって、主は、本気で主に向かう人々に豊かな憐れみを注いでくださいます。今、主の前に本気で出てみましょう。そして、心が倦怠していたことが示されたのであれば、主の前で悔い改めてみましょう。